審査員特別賞

◆審査員特別賞【小学生の部】

近所のおばあちゃん

狭山市立南小学校　四年　佐藤　優心

私はカギっ子です。両親は働いているのでいつも帰ってくるまでお留守番。ある日、ものすごい雨と雷でこわくなり、よくあいさつをする近所のおばあちゃんの家に行きました。「雷がこわくて」と話すと、え顔で家の中に入れてくれました。おやつを食べながら、おばあちゃんと楽しくお話をしました。おばあちゃんが「むかしね、あなたのお兄ちゃんも家にひとりでいるのがさみしくて、こうして遊びに来たのよ。」と教えてくれました。当時はおじいちゃんも犬もいて、お兄ちゃんが来ると喜んでいたそうです。初めて聞きました。今はひとりぼっちになってしまったおばあちゃん。「またさみしくなったら遊びにおいで」と言ってくれました。

数ヵ月後、おばあちゃんが家の前で倒れているのを見つけて、私はびっくりして両親と救急車をよびました。玄関の前の階段で転んで足を骨折していたのです。いたくて助けをよべなかったおばあちゃん。「助けてくれてありがとう」と言われた時、私はなみだが出てしまいました。

あいさつから始まった近所とのつながり。今ではすっかり仲良しです。私は周りの人に支えられ、助けてもらいながら生活をしています。そんな私が助けることもできたのです。これからもお世話になることがあると思うけど、それ以上におん返しができるよう、人の支えになれるようにしていきたいと思います。

◆審査員特別賞【小学生の部】

よりよくするために

羽生市立羽生北小学校　五年　森田　有紀

私は五年になって、代表委員になった。代表委員とは、学校をよりよくするためにある委員会だ。主な取り組みは、全校集会の司会やイベントの計画、実行などである。私は、学校、クラスをもっとよりよくしたいと立候ほした。

五月に大きなイベントのフレンド会があった。フレンド会とは、一年生から六年生まで絆を深める会だ。代表委員のメンバーで内容を考えじゅんびし、当日司会などすべてのことをする。私は、うら方として、クイズを考えたり、一年生のサポートをすることになった。みんなが楽しんでくれるとはいえ、休み時間は、ほとんどじゅんびについやした。クラスの友達は、教室や校庭で遊んでいたりして、ちょっとうらやましくなった。どうして、こんなに、めんどうな事を引き受けてしまったんだろう。そんな時、いつも母が言っている言葉を思い出した。

「だれかのために何かをする。それが自分にかえってくる。大変だと思っても、やってみない

とわからない。」

それから、私は、本番まで一生けん命じゅんびをした。本番当日、全校みんなの楽しそうな声、オーというかん声で、もりあがり大成功した。私は、やったという達成感でむねがいっぱいになった。「あっこれだ。」母の言ってた言葉どおり。自分のためにかえってきた。

そのほかにも、ボランティア活動で、街のごみ拾いもした。すると、通りすぎる人に、「きれいにしてくれて、ありがとうね。」と、声をかけてもらい、うれしい気持ちになった。

本当に、代表委員になってよかった。なぜならば、さまざまな経験を通して、学校をよりよくするだけではなく、私自身も成長することができたからだ。これからも、学校のためにも自分のためにも活動していきたい。

◆審査員特別賞【小学生の部】

支え合って生きていく

白岡市立大山小学校　六年　本澤　卓弥

「すみません、ここはどこですか。」

去年の夏休みに、庭で姉とバドミントンをしていたら、見ず知らずのおばあさんが庭に入ってきて、そう聞かれました。私達はすぐに母を呼んで、わけを話し、みんなでおばあさんの話を聞くことにしました。ところが、住所や名前をうかがっても分からない様子で、私達は途方に暮れてしまいました。

すると、外の様子を気にしていた祖母が家の中から出てきて、そのおばあさんが首からキッズ携帯を下げていることに気がつきました。そこで、その電話を借りて、一番に登録されている方へ連絡することにしました。一番に登録されている方なら、ご家族に違いないと思ったからです。

母が電話をすると、男の人が出ました。事情を話すと、電話口の男の人がおばあさんの息子

さんと分かり、すぐに迎えに来てくれることになりました。

家に入って、おばあさんに飲み物とお菓子を出して、一緒に食べながら迎えを待ちました。三十分位で、息子さんが迎えに来ました。白岡に近い久喜にお住まいだそうです。前にも同じようなことがあったので、それ以来、キッズ携帯を持たせるようにしたそうです。二人は顔を見合わせると、安心した様子で、「ありがとうございました。助かりました。」とお礼を言われて、笑顔で帰っていきました。

高れい化社会の進む日本。時々、市の有線放送でも、人を捜しているのを耳にします。今回の出来事で、決して他人事ではなく、今まで以上に真剣に聞いて、協力していく必要があると感じました。さり気ない会話一つで、解決の糸口が見つけられる場合もあります。困ったときは、お互いさま。これからも助け合いの精神で、支え合って生きていきたいと思います。

◆審査員特別賞【中学生の部】

『自分から』でレベルアップ

加須市立加須西中学校　一年　齋藤　桃香

私は、自分に自信が持てず、
『自分から』
がなかなかできません。
それは、あいさつです。
『おはようございます。おはよう。』
『こんにちは。』
『こんばんは。』
『さようなら。』
『ありがとうございます。ありがとう。』
などです。私は、心で思っていることを行動できないのです。私が行動したら相手はどう思っ

ているのかを考えてしまいます。

私は今年の四月に中学校に入学しました。中学生になり小学生のころよりクラスの人数が増えました。他の小学校から来た人たちがたくさんいます。私と同じ小学校から来た人は、私を入れて六人でした。そうなると、三十人が、知らない人たちでした。私のとなりの席の人も、私の周りも他の小学校の人で、心は不安でいっぱい、頭も不安でいっぱいでした。私は、泣きそうなほどでした。最初の日は誰ともしゃべらず終わりました。次の日です。人見知りな私は、他の小学校の人と少しでも仲良くなりたくて、あいさつをしようと思っていました。しかし、それはとても難しくできませんでした。学校生活にも慣れず、友達もできずで私の心は折れそうでした。三日目に、同じクラスの女の子から名前も言って、

『ももかちゃん、おはよう。』

と言ってもらえたのです。私はびっくりしました。その子の名前は分かりませんでした。でも、

『おはよう。』

とあいさつができました。その日の出来事は今でも忘れていません。その女の子は帰りにも、

『じゃあね～。』

と言ってくれたのです。私は、

『バイバイ。』

と言い、その日は終わりました。

私は、その日からあいさつの大切さを感じました。良いあいさつの仕方を知りました。私は、朝あいさつをしてもらったことがうれしかったです。それは、名前も言ってもらえたから。私を知ってくれてるんだという思いになりました。私は次の日からあいさつを自分から名前も言ってしています。そのおかげで今は、お友達ができました。私はふと、

『自分がされてうれしかった事を人にしよう。』と心の中で思いました。相手からされてうれしかった事は自分でもしようと思いました。私は、あいさつだけでなく小さな出来事でも自分からを忘れず生きています。

私は、自分にされて喜ぶ事、うれしい事、良い事を相手にして自分の経験値を上げ、レベルアップしていきたいです。

◆審査員特別賞【中学生の部】

弟の人生づくり

さいたま市立植水中学校　二年　内田　采良

私には自閉症という障がいをもった弟がいます。弟は小学二年生ですが、話をすることができません。もちろん声は出ますが話す時に文ではなく単語を発したりという状況です。それなので、私は弟の気持ちをしっかりと分かってあげられてない気がしました。

そんな時、お母さんがある一冊の本を薦めてくれました。その本とは、弟と同じ障がいをもった東田直樹さんが十三才の時に執筆した「自閉症の僕が跳びはねる理由」という本です。東田さんも会話をすることができないので、訓練をしてパソコンを使えるようにし、パソコンで執筆したそうです。

私はこの本を読んで、弟が思っていること、考えていることが分かりました。普段、気持ちを伝えることができない弟の心の声が私に真直ぐ届けられたような気持ちになりました。弟について分かった、具体的なことを二つ紹介させてもらいます。一つは競争についてです。弟は

追いかけられると驚くほど速く走りますが競争になると遅くなってしまいます。私はこれを疑問に思っていましたが、本には速く走ることを意識すると、体をどう動かせば速く走れるか考えてしまうとありました。私は、考えて動こうとする精神がすばらしいと思いました。うらやましく思うくらいです。もう一つは質問をしてもオウム返しをされてしまうことについてです。私は本を読む前、答え方が分からないのかと思っていました。けれど実際弟は答え方を分かっていて場面を頭に浮かべるため、オウム返しをしているそうです。そのような事を知らずに思い込んでいた自分が情けなく感じました。弟たちはそれに対応できるよう必死に努力をしているということを知り、とても感心しました。

このように障がいを個性に変え、一瞬いっしゅんをこんなにも大切に生きているということに感動しました。気持ちを伝えられないことが、どんなに辛く悲しいことかが分かりました。その辛さを実感することはできないけれど、接し方を見直し、弟の人生をつくるお手伝いができるようになりたいです。

◆審査員特別賞【中学生の部】

今の私がいるのは

久喜市立鷲宮西中学校　三年　田所　初与佳

中二の二学期後半、私は、不登校になった。

中二の夏、部活動で先輩たちが引退して、頼もしい人たちがいなくなった。二年生が、三人から二人になって、プレッシャーしかなくて、結局、自分の心の弱さが勝って、学校に行けなくなった。プレッシャーを感じているのは私だけではないし、むしろ、部長だったもう一人の子の方が強いと分かっていたつもりだったのに。私だけ逃げてしまった。こんな自分のことが嫌いになった。

学校に行かず、家にいるようになって、たまに先生から電話がくるようになった。私のためだということは分かっていたけれど、正直、放っておいてほしいと思うことも多々あった。でも、私と学校をつないでいてくれていたことに、今では本当に感謝しています。

それからしばらく不登校が続き、三学期の始め頃から、相談室の先生が家の近くまで来て、

話すようになった。そして、相談室に来るか聞かれた。あと、部活をどうするか、とも。迷いはしたけれど、そろそろ勇気を出して、一歩だけ進んでみようと思った。少しして、担任の先生から電話があって、顧問の先生に、部活をやめることを言うことになった。話がいっきに進んで、ついていけなくなりそうで、顧問の先生とどう話したらいいのか分からなくて、すごく恐かった。でも、決まったことだし、自分ではどうにもできなかったから、この機会を使って、自分にけじめをつけようと思った。

相談室登校になって、一日目に、クラスの女子が来てくれた。うれしかった。本当に。まだ学校に、自分の居場所があるのだと、安心した。学校に行くようになって、周りの反応が恐かったけれど、みんな普通に接してくれて、安心した。そして後悔した。この人たちとの時間を短くしてしまったことを。本当に本当にありがとう。

もしも、あのとき、先生が電話してくれなかったら、来てくれなかったら、背中を押してくれなかったら、相談室にクラスの子が来てくれなかったら、今の私はいない。みんなが支えていてくれたから、今の私がいるのだと思う。

あと少しで高校生。今年三年生になって、朝、グズグズしてしまったり、それで遅刻してしまうことも多くある。それでも、本当に体調が悪い時以外は休まないように努力しているつもりではいる。甘いとは思うけれど。それでも、残りの中学校生活を大切にするためにも、後悔

しないためにも、自分のペースでもいいから、前に進んでいきたいと思う。そして、自分の弱さに負けないように頑張りたい。